『西南アジア研究』No. 23, 1984

『クタドゥグ・ビリグ』近刊訳本3種

間　野　英　二

I

ヒジュラ暦462年（西暦1069/1070年），中央アジアのカーシュガルで，ユースフなる一トルコ人によって，中期トルコ語のひとつ，カラ・ハーン朝トルコ語を用いて著わされた君主のための教訓・道徳書『クタドゥグ・ビリグ』*Qutadghu Bilig* が，イスラムを受容したトルコ人の手になる最古の，いわば記念碑的な文学作品である事については，いまここで改めて贅言する必要もないであろう。しかし，このような，この作品の持つ重要性と，その知名度の高さにもかかわらず，この作品を実際に通読した者は，わが国では，なお必ずしも多くはないであろう[1]。

これには，種々の理由が考えられる。まず第1に，現存する3種の写本[2]を比較・対照して作成された，トルコのR.R. アラトによる一応の校訂テキスト[3]が出版されているにもかかわらず，実際には，3写本間の異同があまりにも多く，原本の形がどのようなものであったかを，容易には決定できないという事。第2には，アラトの校訂本を原本にかなり近いものと仮定し，これをそのまま利用したとしても，テキストそのものが暗

1）わが国で，『クタドゥグ・ビリグ』を扱った論文としては，小田寿典「Qutadġu Bilig とイスラム受容」（『「トルコ民族とイスラム」に関する共同研究報告』，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，昭和49年）があるのみである。

2）現在，ウィーン，タシュケント，カイロの図書館に所蔵されているこれらの3写本の写真版が，*Kutadgu Bilig Tıpkıbasım*, I, *Viyana Nüshası* (İstanbul, 1942) ; II, *Fergana Nüshası* (İstanbul, 1943) ; III, *Mısır Nüshası* (İstanbul, 1943) として出版されている。

3）R.R. Arat, *Kutadgu Bilig*, I, *Metin* (Ankara, 1947 ; İkinci Baskı, 1979)。なお，この書の第2版は，堀川徹氏の好意によって入手する事ができた。記して謝意を表する。

喩等を多く含んだ韻文[4]で書かれているため，著者ユースフの意図した所を正確にくみ取る事が必ずしも容易でないという事。第3には，このテキストの中に用いられた語彙の中には，なおその意味が心ずしも明らかでないものが見られる事。第4には，わが国にカラ・ハーン朝トルコ語文献の研究者がなおひとりとして存在していないという事。第5には，アラトによる現代トルコ語への翻訳[5]をのぞき，従来，信頼できる翻訳が存在しなかったという事。そして現代トルコ語への訳本では，それがいかにすぐれていても，わが国ではなおその利用に困難が伴ったという事，などである。

しかし最近，少なくともこの第5番目の障害をとりのぞくに足る3種の翻訳書が，中国，アメリカ，ソ連で相ついで出版された。そこで，まずそれら3本の概容を紹介する事にする。

II

（1） 尤素甫・哈斯哈吉甫著　耿世民・魏萃一訳『維吾爾族古典長詩　福樂智慧』（新疆人民出版社，1979年） 現代中国における古代・中期トルコ語研究の第一人者である耿世民による「導言」（1－11頁）の後，アラト校訂本をテキストとして，散文および韻文の序（1－8頁）と，本文85章の内の73章（9－275頁），それに補篇の3章（276－285頁），計76章を現代中国語に，韻文のスタイルを用いて訳出している。ただし，訳出されている本文の73章の内，例えばアラト校訂本の第26章は，本来バイト番号1591から1849までの359箇のバイト（2行より成る対句）から成るが，これに対応する本書の第25篇（114－119頁）では，その内のわずかに49箇のバイトが訳出されているにすぎない。つまり本書は，「導言」の中でも述べられているように，「時間の関係上」全体を訳出する事のできなかった，文字通りの抄訳本という事になる。もっとも，抄訳本とはいえ，そのようなものすら全く存在しないわが国の現状からすれば，本書にも十分の利用価値がある。ただ，翻訳の省略が全く恣意的に行われているため，この訳本のみから，原本の全体像を推し量る事は不可能である。また，その訳文を原文と比較して検討しようとする場合にも，その訳文が原文のどこに当るかをつきとめるのにやや手間どる。これらの点からすると，訳者は，少なくとも訳出した部分については，アラト校訂本のバイト

4） フェルドウスィーの『シャーフ・ナーマ』と同じく，ムタカーリブの韻律による，マスナヴィー体の詩形を用いて書かれている。

5） R.R. Arat, *Kutadgu Bilig*, II, *Tercüme* (Ankara, 1959 ; İkinci Baskı, *Çeviri*, 1974)

番号を，何らかの形で併記すべきであったと思われる。なお巻頭には，3種の写本の1頁ずつが見本としてかかげられているが，2頁目の「維也納抄本（正文第3，4篇)」と3頁目の「開羅抄本（正文第3篇末尾和第4篇開頭)」という説明は逆で，入れかえるべきである。「導言」では，耿世民が，この書が最初はアラブ文字ではなく，ウイグル文字を用いて書かれたという可能性をなお排除する事ができぬと述べている（4頁）点が注目される[6]。

（2） Yūsuf Khāṣṣ Ḥājib, *Wisdom of Royal Glory (Kutadgu Bilig). A Turko—Islamic Mirror for Princes*, Translated, with an Introduction and Notes by Robert Dankoff (The University of Chicago Press, Chicago and London, 1983） 訳者によるすぐれた序文（作品の特徴，カラ・ハーン朝とトルコ文化，作品の構造，「君主のための教訓文学」，権威の利用，ペルシア語の借用，ギリシア哲学・仏教思想との関係，コーラン・ハディースの引用箇所，スーフィズムとの関係，作品の分析と解釈，使用テキストと翻訳上の問題点，について述べられている）（pp. 1－35）に続き，アラト校訂本に基づいて，本文の85章が，テキスト中の四行詩の部分のみは韻文で，他はすべて散文体で英語に全訳され，各ページの欄外には，一段落ごとにアラト本のバイト番号が併記されている（pp. 37－254)。なお，この本文については，アラトが付篇Ⅲとして扱った「著者大侍従ユースフが自らに対して忠告する」の章（バイト番号6605－6645）を，訳者が付篇ではなく，本文として扱っている点が注目される。この本文の後に，付録1として，カイロ本にのみ見える2つのカスィーダ（すなわち，アラトの付篇Ⅰ，Ⅱ：バイト番号6251－6604）を訳出し（pp. 255－257)，付録2として，訳者が後代の追加と考える韻文・散文の2つの序文を訳出し（pp. 258－261)，付録3として，訳者がアラト校訂本の読み方とは異なった読み方をした部分に関する，アラトの読みと訳者の読みとの対照表をかかげ（pp. 262－263)，付録4として，ペルシア語の借用の実例を列挙し（pp.

6） この他，中国の研究では，耿世民『古代維吾爾詩歌選』（新疆人民出版社，1982年）の131－215頁に，『クタドゥグ・ビリグ』の20章分の中国語訳とテキストの現代ウィグル文字（維語新字）への転写が記載され，また最新の論文としては，艾合買提・孜牙依「論珍貴的遺産≪福樂智慧≫」（『新疆社会科学』1984－1）；劉志霄「時代巨変的産物－談維吾爾族古典長詩≪福樂智慧≫」（『同』）がある。

264－267），最後に比較的簡潔な註（pp. 269－281）を付している。訳者のダンコフは，最近，カーシュガリーの『トルコ語辞典』の英訳[7]の刊行を開始し，またかねて『クタドゥグ・ビリグ』等に関するすぐれた論文[8]を発表してきた事からもわかるように，カラ・ハーン朝トルコ語文献研究の数少ない専門家のひとりである。今回の訳本も，その明解な序文といい，読み易い本文といい，期待にたがわぬ出来ばえであるといえる。

（3）Юсуф Баласагунский, *Благодатное Знание,* Издание подготовил С. Н. Иванов (Москва,1983) アラトの校訂本を用いて，その全文を韻文スタイルのロシア語に訳出したもの[9]。散文序・韻文序・目次の後に，本文85章を全訳し（стр. 30－483），最後にアラト本の付篇Ⅰ，Ⅱ，Ⅲを訳出している（стр. 483－492）。欄外にはアラトのバイト番号が，5バイトごとに付記されており，原文との対照は容易である。これらの翻訳の後に，A.H. Кононов,"Поэма Юсуфа Баласагунского *«Благодатное Знание»,* С. Н. Иванов,"О *«Благодатном знании»* Юсуфа Баласагунского"（стр. 518－538）という2つの解題をのせ，最後に簡明な註（стр. 539－557）を付す。縦17 cm，横11 cmの，瀟洒な感じの小型本である。この2つの解題には，この書物に関するソ連の業績を中心とする研究史が記載され（стр. 513－517；531－533），またコノノフの解題には，『クタドゥグ・ビリグ』という書名をどう解釈すべきかという問題と，この書物でユースフが使用した言語を何語と名づけるべきかという2つの問題に関する諸説が紹介されていて（стр. 496－498；502－505）興味深い。なお，訳者のイワノフには，他にアブル・ガーズィーの『トルコ諸族

7）R. Dankoff and J. Kelly, *Compendium of the Turkic Dialects (Divan Lugat at—Türk),* Part I (Duxburg, Mass., 1983)

8）R. Dankoff, "Animal Traits in the Army Commander," *Journal of Turkish Studies,* 1, 1977 ; do., "Textual Problems in Kutadgu Bilig," *JTS,* 3, 1979 ; do., "On Nature in Karakhanid Literature," *JTS,* 4, 1980 ; do., "Inner Asian Wisdom Tradition in Pre-Mongol Period," *JAOS,* 101/1, 1981.

9）近年のロシア語への翻訳では，ラードロフ出版のテキストを用いた韻文による抄訳として，Юсуф Хаджиб Баласагунский, *Наука быть счастливым,* перевод Н. Гребнев (Ташкент, 1963 ; Москва, 1971) があり，また現代ウズベク語へのテキスト転写と翻訳として，*Хос Ҳожиб, Қутадгу билиг (Саодатга йўпловчи билим). Транскрипция ва ҳозирги ўзбек тилига тавсиф,* Нашрга тайёрловчи Каюм Каримов (Тошкент, 1971) がある。

の系譜』の文法研究[10]がある。

Ⅲ

それでは，これらの3書の訳文は，原典と比較して，はたして妥当なものであるのかどうか。ここでは，この問題を，バイト77を例に，この3書に先行した他の諸訳とも比較しつつ，検討してみる事にしたい。なお，バイト77は，アラト校訂本の第4章「輝やかしい春とウルグ・ボグラ・ハンにささげる讃歌」（バイト63－123）中の一節で，詩人が美わしい春の情景をうたった部分の一部である。

まず原写本の写真版に，バイト77がどのように書かれているかを，Transliteration によって示す。

A. ウィーン本（14頁，11行目）

ä'r-' čwm-äwä "dty syd' twmswäyn/ 'wny 'wä- l 'äw q'z 'wny t'k y'äyn

B. フェルガーナ本（18頁，10行目）　QRA ḤMĠWQ ATY SYTA(or SYBA or SYYA) TWMŠWQY / AWNY AWĠLAĠW QYZ AWNY TK TQY

C. カイロ本　この部分を欠く。

AB 二本に基づいて作成されたアラト校訂本（25頁）では，

ḳara çumġuḳ ötti sıta tumşuḳın / üni oğlağu ḳız üni teg yakın

としている。つまりアラトは，原写本のA. *"dty*, B. ATY を校訂に際して *'wytty*, AWTY と読みかえ，またA. *q'z*, B. QYZ ではA. をとり，*twmswäyn*, TWMŠWQY および *y'äyn*, TQY でもA. に従っている事になる。

次に，このバイトについて，現在筆者の手元で利用できる10種類の訳文を発表の年代順に列挙し，それぞれの後に筆者による重訳を付す。

1）Vámbéry 1870[11], S. 69　Der schwarze Sperling (?) warf den glatten Schnabel auf, Mit seiner Stimme beinahe der Gans nachahmend（黒い雀(？)がすべすべした嘴を上げた。その鳴き声はまるで鵞鳥のよう）。

10）*Родословное древо тюрок Абу-л-Гази-хана Грамматический очерк. (Имя и глагол). Грамматические категории* (Ташкент, 1969).

11）H. Vámbéry, *Uigurische Sprachmonumente und das Kudatku Bilik* (Innsbruck, 1870).

2） Radlov 1910[12], S. 19 Der schwarze Tschumkuk (?) wirft auf seinen glatten Schnabel, Seine Stimme tönt in der Nähe wie die Stimme der Gans（黒いチュムクク（？）がすべすべした嘴を上げる。その鳴き声は，鵞鳥の声の如く近くでひびく。）

3） Малов 1951[13], стр.239 Черный ворон (с белыми крыньями) прожорливо глотает (управляется, со) своим острым клювом. Его крик раздается, как крик гуся вблизи〔白い翼を持つ〕黒い大がらすが，その鋭い嘴で〔それを巧みに使いながら〕がつがつ食べている。その叫び声が広がる――まるで近くの鵞鳥の如く）。

4） Arat 1959[14], s. 17 kara çumguk mızrak gibi gagası ile ötüyor ; sesi, nazlı kızın sesi gibi, cana yakındır（黒いチュムグクが槍のような嘴で歌っている。その声は，恥じらう乙女の声の如く愛らしい）。

5） *Древнетюркский словарь* 1969, стр. 423 запищала чомга, долья своим клювом（チョムガが，その嘴でつつきながら，きいきいと鳴いた）。

6） Dilâçar 1972[16], s. 73 Kara karga (kuzgun) ötüyor, güneş ışını gagasıyle, sesi nazik bir kızın sesi gibi (cana) yakın（黒いからす〔わたりがらす〕が陽炎の嘴で歌っている。その声は，繊細な乙女の声の如く愛らしい）。

7） Clauson 1972[17], p. 423 the blackbird (？) sings with his coral beak, his voice is like the voice of a delicate maiden（くろうたどり（？）が珊瑚の嘴で歌っている。その声は繊細な乙女の声のよう）。

8） 耿世民 1979, 19頁 杜鵑低声啼叫，声音柔如少女的妙音（ほととぎすが低い声で啼いている。その声音は柔らかく，まるで乙女の妙音のよう）。

9） Dankoff 1983, p. 41 The black chumġuḳ warbles with his coral beak, his voice like that of a well-bred girl（黒いチュムグクが珊瑚の嘴でさえずっている。その声は，

12） W. Radloff, *Das Kudatku Bilik des Jusuf Chass-Hadschib aus Bälasagun*, Theil II (St. Petersburg, 1910).

13） С. Е. Малов, *Памятник древнетюркской письменности. Тексты и исследования* (Москва-Ленинград, 1951).

14） 註5）前掲書。

15） В. М. Наделяев, Д. М. Насилов, Э. Р. Тенишев, А. М. Щербак (редакторы), *Древнетюркский словарь* (Ленинград, 1969).

16） A. Dilâçar, *Kutadgu Bilig İncelemesi* (Ankara, 1972).

17） G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish* (Oxford, 1972).

まるで大事に育てられた乙女のよう)。

10) Иванов 1983, стр. 36　И ворон кричит, поднимая свой клюв, И гуси скрипят, долу щею пригнув　(そして大がらすが叫ぶ，その嘴を上げながら。そして鵞鳥ががあがあと鳴く，その首を下に引きつつ)。

Ⅳ

さて，以上の10種類の翻訳を比較すれば，そこにはあまりにも多くの異同があって，なお定訳と称しうるものが存在しない事に気づくであろう。それでは，このような異同が，いったい何故生じたのか。この点を，ここでバイトを前半部と後半部に分けて考えてみる事にする。

Ⅰ．前半部について

① 原文の，鳥の1種である事が明らかな「カラ・チュムグク」が，何を指したものであるかがなお不明である事。これについては，1）2）共に「黒い雀」「黒いチュムクク」とするが（？）を付し，3）6）では，「黒い大がらす（わたりがらす)」，7）では，つぐみの1種である「くろうたどり（？)」，8）では「ほととぎす」，4）5）9）では「黒いチュムグク」とか「チョムガ」とする。この語を「ほととぎす」ないし「つぐみの1種」と見るか，それとも「大がらす」と見るかによって，この詩全体のイメージは全く異ったものとなり，以下の詩文の翻訳が相違してくるのは当然である。すなわちこれは，『クタドゥグ・ビリグ』には，なおその意味がはっきりしない語彙[18]があって，それが翻訳を多様にしている実例である。

② 1）2）で「すべすべした」，3）で「鋭い」，4）で「槍のような」，6）で「陽炎の」，7）9）で「珊瑚の」と訳出されている部分は，アラト校訂本の“sıta”の部分にあたる。この内，1）2）は，この単語を siba，сыба と読み，チャガタイ語の sıpalamaq（「滑らかにする」)，ハンガリー語の sima（「滑らかな」）と関係のある単語と解釈した結果出された訳語である。しかし，この読み方は，ウィーン本の綴字を誤読したものであって，従う事はできない。この部分は，少なくとも sıta/site ないし sıda/side と読むべきである。3）4）は，この内の sıda という読み方を採用したものと思

18) 筆者も『五体清文鑑』その他の各種辞典を検索したが，カラ・チュムグクという語を発見できなかった。ダンコフは註（p. 275）の中でチュムグクについて「カーシュガリーによれば〈白い脚をしたからす〉。クローソンは〈くろうたどり〉ではないかとする」と記している。

われる[19]。何故なら，ラードロフの辞典に，サガイ語で sıda が「槍」の意味で収録されているからである。6）7）9）は sıta ないし sata と読み，クローソンの説に従ってこれをアラブ語 saṭī'（「あけぼの」）に由来する外来語とみなし，カーシュガリーに見える sıta（「珊瑚」）をその語義として採用したものである。これに対して5）は，この語を動詞 sıt–（「つつく」（？））の converb と解したものと想像され，また10）も動詞 sıt–（「持ち上げる」）のconverb と解したものと断定できる。もっとも，筆者は「つつく」を意味する動詞 sıt– の存在をなお確かめえていない。残る8）の「低声」というのは，どうしてこのように訳出されたのか，筆者には推定不可能である。ただし，8）以外の9種の訳本すべてに訳出されている原文の tumşuḳ（「嘴」）が，8）でのみ訳出されていない所から見ると，8）のこの部分はかなりの意訳といえるのではなかろうか。そしてもしそうであれば，8）は単に抄訳というだけでなく，同時にまた，訳出した部分についても，原典の厳密な訳出とはいえない部分をも含む事になろう。以上を要するに，この部分は，1つの単語を，形容詞ととるか，動詞ととるかによって，意味がまったく異なっている実例である。なお筆者は，6）7）9）の解釈をとる。

③　1）2）で「(嘴を）上げた；上げる」，3）で「がつがつ食べている」，4）5）6）7）8）9）10）で「歌っている」「きいきいと鳴いた」「啼叫」「さえずっている」「叫ぶ」と訳出されている部分は，1）2）3）共にテキストを attı と読んだものである。ただ1）2）では，これを「投げ上げる」を意味する動詞 at– ととったのに対し，3）は「がつがつ食べる」という意味での動詞 at– に結びつけている。これに対して4）以下10）に至る諸訳は，この動詞をアラトの校訂に従って ötti と読んだものである。いうまでもなく動詞 öt– は「歌う，鳴く」を意味する。しかし筆者としては，原写本に "dty，ATY としか記されていない以上，これをアラトの如く ötti と読みかえる事には賛成しかねる。むしろこれを ẹtti と読み，意味の上では ötti と同様「歌った」と解す

19）もっとも3）のマーロフは，239頁のウイグル字テキストでは *s'b'* とし，424頁の語彙集では "syp- прожорливо глотать, QBW, 14₁₁"と記し，同じく361頁では "at-　(о вороне) sypa adty(?) прожорливо глотал, QBW,　14₁₁" とするから，この単語を sıpa と読み，動詞 sıp–（「がつがつ食べる」）の converb ととった可能性が強い。しかし，そうすると，マーロフがどの語を「鋭い」と訳したのか，全く分らなくなる。テキスト（*s'b'*）と語彙集の写し方（sypa）が一致していないように，語彙集の記述と訳文もまた一致していない点があるのであろうか。

べきだと考える。なお，「歌う」を意味する動詞として öt–，et– の２つの形があったと見る見方は，『古代トルコ語辞典』（186，391頁）にも見える。

Ⅱ．後半部について

① 第３語を qaz（「鵞鳥」）と読むか，qız（娘」）と読むかによって，翻訳は，１）２）３）10）のグループと，４）６）７）８）９）のグループに大別される。

② qaz と読むグループの内，１）は第２語（アラト校訂本の oġlaġu）を oḳlaḳar と読み，動詞 oḳla–(「似る」「まねる」）から出来た動詞の aorist と解し，２）はこれを оклаҗар と読み，動詞 окла—（「音を出す」「鳴る」）から出た動詞の aorist と解している。しかし，写本の綴字から見ると，この読み方は明らかに誤りであり，従う事はできない。３）はこれを oqlaqu と読み，動詞 oqla–(「広がる」）に関係づけている。10）は，oqla– の意味については２）の解釈を継承しているが，第４，第５，第６語（アラト校訂本 üni teg yakın）を，おそらく öni (?) tek taqı と読んだものと思われる。つまり第５語を teg（「～の如く」）ではなく，tek（「下に」）と読み，第６語は yaqın（「近い」）ではなく，フェルガーナ本に従って taqı と読み，動詞 taq–(「引く」）の converb と解したものと思われる。第４語は ön＋ i（又はon ＋ ı/ün ＋i /un ＋ ı）と読み，ön（又は on/ün/un）を「首」と解したものと思われるが，筆者はなお ön/on/ün/un のいずれかが，辞書に「首」の意味で記述されている例を確かめえていない。ön（「前」）から類推して，「前の方にあるもの」の意味で「鳥の首」を想定できぬ事もないが，この点については大方の示教をあおぎたい。それはともかくとしても，１）２）３）４）６）７）８）９）が第５語を teg（「～の如く」），第６語を yaqın（「近い」）と解しているのに比べると，この10）の解釈は，きわめてユニークなものであるといわねばならない。

これに対して，第３語を qız と読むグループでは，ほとんど翻訳が一致している。qaz と読むグループでさまざまに解釈された第２語（アラト校訂本の oġlaġu）も，ここではいずれも qız を修飾する形容詞と解され，その訳語もほぼ等しい。ただ細かく見ると，８）が例によってこの語を必ずしも直接に訳出していないのに対し，９）がこの語についてのカーシュガリーの語釈を援用して “well–bred” と丁寧に訳出しているのが眼につく。

筆者は，このバイト77と密接な関わりを持つ，これに先行するバイト74，75，76の後半部が，「一列になったラクダの如く」「浄らかな乙女が呼ぶが如く」「その口は赤きこと血の如く」のように，いずれも「～の如く」を意味する teg を含んでいる点から考えて，バイト77で特に趣きを変えて teg ではなく tek と読む10）の新説には無理があると

考える。従って，この部分の解釈としては，q1z のグループの解釈をとりたい。なお，イワノフが，アラト校訂のテキストとは異った読み方をした場合には，その自らの読みを，ダンコフが対照表にして明記したように，何らかの形で提示していたら，彼のオリジナリティーに富んだ解釈は，より明確に読者に理解されたであろう。

V

以上述べた所に基づいて，バイト77についての筆者の訳文を記すと，「カラ・チュムグクは歌う――その珊瑚の嘴で／歌声は愛らしく，まるで良家の乙女のよう」となる。つまり筆者の訳文は，耿世民・魏萃一，ダンコフ，イワノフの３種の新訳の内では，ダンコフの訳文に一致する事になる。筆者は，この３種の新訳について，この小論でこころみたような訳文の詳細な比較・検討を，6500を越える『クタドゥグ・ビリグ』の全バイトについて完了したわけではない。しかし，ここで取り上げたバイト77をはじめ，他のいくつかのバイトに関する３者の訳文を検討した限りでは，およそ次の如くいえるように思われる。まず耿・魏の中国語訳は，抄訳である点がもの足りない上に，訳そのものも，いささか厳密さに欠ける。しかし，その箇々の訳語は，同じ漢語を使用する我々には，参考になる場合が多い。次にダンコフの英訳は，正確な，無理の少ない，オーソドックスな翻訳で，現在最も信頼できる訳本と考えられる。イワノフのロシア語訳は，オリジナリティーを出そうとしたためか，解釈にやや無理がめだつ。しかし，そのオリジナルな考え方には魅力があり，ダンコフの訳本を利用する場合にも，これをも参照する事が望ましい。

『クタドゥグ・ビリグ』は，上述した所からも推測されると思われるが，決して扱い易い書物ではない。翻訳を利用するにしても，その訳文を逐一不完全な写本と対照して自らその正誤を確かめない限り，安心して利用する事は不可能である。しかし，そのトルコ文学史上・中央アジア文化史上の重要性を考えれば，これを利用せずに放置しておく事はできない。その意味からも，ここに紹介した３種の近刊訳本にも導かれて，わが国にも，この興味深い文献と正面から取り組む研究者が出現する事を期待したい。